

# 能 と 京 劇

～ 日 中 比 較 演 劇 論 ～

金 文 京 著



日中の比較から解かる多くの

## 共通性と独自性

中国

戯  
劇  
京  
劇  
亮  
相

共通

見  
得  
変  
身  
假  
意  
本  
面  
心  
脚  
色  
醉  
態  
樂  
器

日本

能  
歌  
舞  
伎  
限  
取  
り  
だ  
ん  
ま  
り  
散  
樂

# 能と京劇

『日中比較演劇論』

金文京



見得「歌舞伎荒事」毎日新聞社1990年45頁より

## 能と京劇 『日中比較演劇論』

金文京

はじめに——なぜ日中の演劇を比較するのか?……………4

### 一 歌舞伎と京劇

一 歌舞伎と京劇の共通点(一)——隈取りと臉譜……………8

二 歌舞伎と京劇の共通点(二)——見得と亮相・だんまり……………14

三 部分のみの上演……………19

四 役者のための芝居づくり——「魚屋宗五郎」……………23

五 京劇も役者の芸をみせる芝居——「貴妃醉酒」……………27

六 なぜ酔態を演じるのか?——歌舞伎と京劇のドラマツルギー……………29

七 「魚屋宗五郎」と「貴妃醉酒」の時代背景……………33

## 二 能と元曲

一 能と変身	36
二 能と中国文学	38
三 中国との交流を示す能	41
四 中国元代の雜劇——元曲	43
五 脚色について	45
六 元雜劇における変身——『趙氏孤児』を例として	50
三 中国の仮面劇——儺戲 <sup>なぎ</sup>	
一 中国演劇史と仮面劇	58
二 鬼やらいの劇	61
三 桂林の儺戲——令公の三層仮面	66
四 儺戲と能の楽器	70

五 儺戲と能の仮面	72
六 桂林儺戲の歴史と日本との交流	75
おわりに——日中演劇の共通性と相違点	

一 演劇と宗教儀礼	80
二 文化の独自性と外来の影響	82
三 中国文化における演劇	84
四 日中の文化観の相違と演劇	87
参考文献	91

## はじめに——なぜ日中の演劇を比較するのか？

本書のタイトルは『能と京劇』としてありますが、能と京劇だけについてお話するわけではありません。本当は、歌舞伎や中国の仮面劇など、副題にあるように日本と中国の演劇をできるだけ広く比較してみたいと思いますが、それではタイトルが長くなってしまいますので、代表として能と京劇をあげたまでです。ではなぜ日本と中国の演劇を比較する必要があるのでしょうか。まずその点について、はじめに簡単にお話したいと思います。

現在私たちがふつうに見ている演劇、テレビドラマや映画もその中に入りますが、それらほだいたい西洋の近代演劇の概念によって作られています。それは一言でいうと写実劇、つまりお芝居ではありますが、できるだけ本当らしく見せる芝居のことです。中には前衛劇のように写実的でないものもありますが、それも写実劇に対するひとつのアンチテーゼとして出てきたものです。

これに対して、日本の歌舞伎や能は写実劇ではありません。また西洋のオペラやミュージカルも登場人物が歌ったり、踊ったりするわけですから、写実劇とは言えません。現在

の日本でふつうに見られる演劇は、だいたいこの三つ、つまり西洋近代演劇概念にもとづく写実劇、西洋の歌劇であるオペラやミュージカル、そして日本の古典劇である能と歌舞伎でしょう。

このほか最近では京劇や昆劇など中国古典演劇が日本で上演される機会がふえ、ご覧になった方もおられると思います。中国の古典劇はドラや胡弓のにぎやかな音楽、孫悟空の芝居のようにトンボを目ぐるしく切るアクロバチックな演技など、非常に特色のあるものですが、これを日本の能や歌舞伎と関係づけて考える方はあまりおられないと思います。あるいは俳優が歌をうたう点は、西洋のオペラと共通するという見方もありうるでしょう。

しかし実は、能や歌舞伎など日本の古典劇は中国の古典劇と歴史的に密接な関係にあると思えます。ただしそのことを文献的に証明することはむずかしい。それは裏付けとなる資料がほとんどないからです。にもかかわらず、日本と中国の古典劇を子細に比較してみると、そこにはいくつかの重要な共通点があり、とても偶然とは思えません。

この本の目的は、そのことをできるだけわかりやすく説明し、能や歌舞伎は一般に思われているような日本独自のものではなく、その特色の少なくとも一部は中国の古典劇と共通し、またその起源において中国からの影響が考えられるということを示すことにありま

す。

日本の文化が歴史的に中国から多くの影響を受けていることは、いまさら言うまでもないでしょう。『論語』や『老子』などの哲学書、『史記』などの歴史書、白楽天や李白の漢詩、そして『三国志』『水滸伝』などの近世小説、そのどれもが日本では長い間、多くの人々に愛読されてきました。しかし中国の演劇、そしてその台本である戯曲は、日本ではあまり知られていませんでした。演劇と戯曲は日本の中国文化受容における大きな盲点であったと言えます。

近世以降の中国は、実は演劇大国でした。都会には早くから多くの劇場があつて人々を楽しませ、お祭りや宴会などの機会には芝居はつきものでした。私たちには理解しがたいことですが、葬式でも芝居が上演されたのです。演劇は人々の日常生活に深く入り込んでいました。現在でも地方ごとに特色ある地方劇があり、中国人ほど芝居好きな国民は世界でもまれであると思えます。それほど盛んであつた中国の演劇が、中国文化に多大の関心を持ち、それを熱心に輸入した過去の日本にまつたく伝わらなかつたということは、ちよつと考えられないことです。江戸時代の日本人は鎖国のため、海外に行くことはできなかつたので、中国の芝居を見る機会もなかつたでしょう。しかしそれ以前の鎌倉、室町時代は、

近代以前において日本と中国の交流がもつとも盛んな時代で、多くの人々がひんばんに往来していました。そのような往来の過程で、中国の演劇が日本に伝わり、能や歌舞伎に影響をあたえることは本当になかつたのでしょうか。これは日中文化交流史上の大きな問題でもあります。

## おわりに ― 日中演劇の共通性と相違点

### 一 演劇と宗教儀礼

以上、日本と中国の演劇について、歌舞伎と京劇、能と元雜劇、そして能と儺戲という風に比較をしてみました。そこには限取りや見得のように、見てすぐ分かる共通点から、一部だけを上演する形態や、役者中心で役柄（脚色）を重んじる類型的な作劇法、さらに変身や本性の開示という演劇理念に関する考え、また能と儺戲の伴奏楽器の類似など多くの共通性があることがご理解いただけたのではないかと思います。

少し共通点を強調しすぎたかもしれませんが、この千数百年の間、日本と中国の間には、時代によって差はありますが、一貫して密接な交流関係があり、日本は中国のあらゆる文化を熱心に学習したことを考えれば、これらの共通点は偶然に帰するにはあまりにも多すぎるように思えます。

特にヨーロッパの演劇などと比較すると、日本と中国の古典演劇は、演劇の起源である

宗教性を後世まで比較的良好に残していると思えます。ヨーロッパの演劇も起源はむしろ宗教儀礼にありますが、後世になるとそれが薄れ、たとえばシェークスピアの演劇などは、娯楽性あるいは文学性が強くなり、むしろテーマとして宗教性が取り上げられることはありませんが、起源としての宗教儀礼の痕跡はほとんど見られません。これに対して、歌舞伎や京劇は商業的娯楽劇という側面を強くもつ一方、どこかに限取りに象徴されるように宗教儀礼のシッポのようなものを残している。

歌舞伎は後になると黙阿弥の作品など、かなり写実劇に近くなり、京劇も後のものは、歌よりも台詞が中心になり、歌舞伎ほどではありませんが、写実性を強めていきますが、双方ともついにヨーロッパのような写実劇にならなかったのは、やはり宗教儀礼のシッポを完全に払拭しきれなかったからではないかと思えます。一方では宗教性をさらに強くともめた能や儺戲のような仮面劇が現存していることも、そのことを物語るでしょう。

日中の演劇がヨーロッパにくらべて起源としての宗教性を色濃く残しているのはなぜでしょう。これはヨーロッパと東アジアの社会的性格の相違という、より大きな問題に関連することですから、ここではこれ以上は申し上げないことにいたします。

## 二 文化の独自性と外来の影響

従来、日本と中国の演劇の共通性が必ずしも十全に考察されて来なかったのは、たとえば儼戯が最近になってようやく知られるようになったように、双方とも相手の事情がよく分からなかった、また文献資料がほとんどないことなどが理由であったと思えます。

しかしそれ以上に重要なのは、意識の問題です。日本では能や歌舞伎は日本の独自の文化であるという考えが強いので、中国と似ている点があつても、それを積極的に追究してこういう姿勢にはなかなかならない。中国の影響があるとすると、独自性にケチがつくように思えるわけです。

一方、中国は古い文明国ですから、自国の文化についての自負心が強い。いわゆる中華思想です。特に日本のように古くから中国の文化的影響圏内にあつた国については、ややもすれば日本の文化は中国から伝わったものだと考えがちで、なかなか日本文化の独自性を認められないという事情があります。

この両者が出会うと、一方はすべて中国の影響だと言う、もう一方はいやちがうと言う、というわけで、なかなか厄介なことになります。しかし考えてみれば、あらゆる文化現象

には、なんらかの外来の影響がつきもので、まったく純粹に形成されるという例は稀れます。中国の演劇もインドや西方の影響を実は強く受けていると考えられます。分かりやすい喩えを申し上げますと、今みなさんが日本料理を召し上がるとします。しかし今やその材料は世界各国から輸入されていて、蕎麦や豆腐のような日本食品と思われているものでも、材料は外国産です。あるいは調理法にも外来の影響があるでしょう。しかし出来上がったものはれっきとした日本料理です。ですから文化の独自性と外来の影響は、本来矛盾するものではないのです。

ある一つの文化現象を研究する場合、それと近隣の古くから交流のあつた国の同様の文化現象との間に似ているところがあれば、ひとまず両者の間になにか影響関係があつたのではないかと仮定して、その可能性を探ってみるというのが、客観的な学問的態度でしょう。日本と中国の演劇の間にこれだけの共通点が見いだせる以上、そこになんらかの影響関係があつたと仮定して、その可能性を追求するのは当然のことです。そしてそれは能や歌舞伎が日本独自の文化であることを、いささかも損なうものではないのです。



### 三 中国文化における演劇

これまで日本と中国の演劇の共通性について申し上げましたが、最後に相違点についてお話したいと思います。日中の演劇の間にはむろん多くの相違点がありますが、もっとも重要な違いは、文化全体における演劇の位置づけです。

日本では宗教儀礼の影響の強い農村、山村などの神楽などがあり、それと密接な関係にある能は、中世以降、武家文化の中に取り込まれました。そして能からの影響も受けて近世に現れた歌舞伎は都市の庶民の演劇です。この三者は、江戸時代には能の格式が高く、歌舞伎はそれより低く見られていたということはありますが、全体としては受容層の社会的身分を異にしながらも、ゆるやかにつながり共存していたと言えます。特に能は武家文化の中で高い地位をあたえられています。

しかし中国では事情がかなり異なります。中国は儒教の国ですが、儒教はもともと非現実的、超自然的な事柄を否定する傾向が強く、そのような内容をもつ小説や演劇は価値のないものだとみなしていました。京劇は今でこそ国劇として中国文化の代表の一つとして重要視されていますが、これは西洋の文化観の影響で、中国伝統の考え方ではありません。

特にこの点が顕著なのは、宗教性のもっとも強い儺戯です。先に陸游と周去非が桂林の儺戯を称賛した言葉を紹介しましたが、それは桂林の仮面が珍しかったので言及したままで、その価値を肯定し、それが重要な文化であると考えていたわけでは決してありません。二人のように儒教的教養を身につけた知識人が、演劇しかも儺戯のように宗教色の濃い演劇を積極的に肯定することは、ありえないことです。

そのことは、陸游とほぼ同時代人である朱子（一一三〇—一二〇〇）が、『論語』で孔子が郷儺の際に、朝服を着て自分の家の階段に立っていたという一節につけた注釈によく現れています。朱子是这样言っています。

儺は古礼ではあるが戯（芝居）に近いものである。それでも朝服を着て、それに臨んだのは、孔子はあらゆることに誠と敬意を尽くす人であったからである。或いは、追儺の騒ぎが先祖の神霊を驚かすのではないかと心配して、先祖が自分を頼りにして安心できるようにそうしたのである。

まず「儺は古礼ではあるが芝居に近い」というのは、朱子も陸游たちと同じように、追



儼儀礼から発展した当時の仮面劇の存在を知っていたことを物語っています。それに対して二つの解釈を示していますが、後者は追儼から先祖の霊を守ることですから、追儼に対して警戒的、否定的な態度になります。前者ははっきり否定こそしていませんが、「追儼のようなつまらないものにでも、孔子は誠敬を尽くした」ということで、孔子が偉いと言っているのです。追儼についてはやはり否定的です。朱子が提唱した朱子学は、その後の中国だけではなく、江戸時代の日本にも大きな影響をあたえました。江戸時代に歌舞伎をいやしいものと見る考えの中には、朱子学の影響もあると思えます。

これが中国の伝統文化における演劇、特に宗教的演劇に対する基本的な考え方です。元代には都市部では雜劇が流行していましたが、農村では儼戲のような仮面劇が行われていました。この時代の法令を集めた『元典章』という本には、北京の近くの農村で農民が仮面劇を演じるのを禁止した法令が載っています。これ以降も儼戲は一貫して否定的に見られ、またしばしばいがわしいものとして弾圧の対象になりました。

これは儒教が社会の指導的思想であった近代以前の話ですが、新中国になって社会主義が儒教に代わって指導的思想になっても、事情はあまり変わりませんでした。京劇などは西洋の影響で国劇として重視されましたが、農村の儼戲は依然として否定的に見られ、宗

教は阿片という社会主義の考えによって、以前より厳しく禁圧されました。その頂点は文化大革命による破壊です。

儼戲が復活したのは八〇年代の改革開放のおかげですが、これもどさくさに紛れて復活したという印象で、決して積極的に評価されているわけではありません。一九九七年、桂林で開かれた儼戲の国際学会に私が出席した時、会議を主催した中国側の責任者は、儼戲について、「こういうものは文化ではない、我々はこういうものが無くなるように努力している」と私に語りました。これは朱子の考えと同じです。

#### 四 日中の文化観の相違と演劇

どこの国でも文化は多くの層をなしています。大ざっぱに言えば基層の文化（大衆文化）と上層の文化（エリート文化）、あるいは都市の文化と農村（山村や漁村も含むものとして）の文化があります。そして上層の都市文化はたいてい基層の農村文化から発展したものです。日本をはじめ多くの国では、これら基層から上層にいたるさまざまな文化の層が、階層差、空間差をとめないながらも、ゆるやかにつながり共存しています。しかし中

国ではこの両者の間に大きな隔たりがあり、上層文化、都市文化は自分の淵源である基層文化、農村文化をしばしば否定的に見なし、はなはだしい場合は弾圧さえするのです。

それはなぜかという、中国はとにかく広い国ですから、基層の文化は地域ごとに多様です。その多様な基層文化から最大公約数的に抽出されたものが、すなわち上層文化です。したがって上層の文化はきわめて人工的な文化ということになります。文化は人間が創るものですから、人工的文化というのはおかしい言い方ですが、申し上げたい意味は、人間の生活の中から自然に生み出された文化と、それを練り上げた抽象度の高い文化があるということ。どこの国の文化にもこの両者がありますが、中国はその両者の間の距離がほかの国よりも大きいということです。

これを言葉と文字のレベルでお話すると、中国各地の方言は、話しをしても互いに通じないほど違いますから、方言といつても外国語と同じです。しかし漢字はみな同じですから、漢字で書けば互いに理解することが出来ます。言葉は生活の中から自然に生まれたものです、文字はそれを意識的に抽象化したものです。中国が統一を維持するためには、この抽象化された漢字に基礎をおかなければなりません。もし方言を基礎にすれば、ヨーロッパのようにばらばらになってしまいます。それと同じく、文化の基礎は上層文化、た

とえば儒教に置かねばならず、そのためには基層文化はある程度は犠牲にせざるをえないのです。

これまで中国の仮面劇のことを儺戯とよんできましたが、この儺戯という名称は、古代の儒教経典である『周礼』にみえる方相氏の追儺儀礼から各地の仮面劇が発展したという前提にたった名称です。しかし各地の仮面劇が本当に古代の追儺から一元的に発展したのかどうかは、実は疑問です。あるいは地域ごとに別の起源があったのかもしれない。にもかかわらず、それらを儺戯として統一的にとらえようとしているわけです。儺戯の範囲や定義については、中国でも議論の分かれるところで、儺戯がいまだに中国演劇史の中できちんと位置づけられていないのも、そのことが一つの原因になっています。

日本は古代から中国の文化を熱心に吸収してきました。しかし日本が学んだ中国の文化はおもに文字に書かれた上層文化です。日本は中国文化を輸入したが、日本の文化の本質はどうも中国とは違うようだという議論があります、これは日本文化と中国の上層文化を比較したため、そういう議論になるので、中国の基層文化と比較すれば、案外共通性が多いということになると思います。日中の演劇の共通性を考えることは、そのような両国の文化の枠組の違いを考えることにもつながるのではないかと思います。

以上、大変に雑駁な話で、最後は大風呂敷になってしまいましたが、これで私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

本書は二〇一〇年五月二二日、財団法人国際高等研究所で開催された「高等研公開講演会」の内容を再構成したものです。

## 参考文献

### 一 歌舞伎と京劇

- 図2 『京劇臉譜』 江蘇人民出版社
- 『清宮戲画』 百花文芸出版社
- 図4 『清宮戲画』 百花文芸出版社
- 図9 『中国戲曲通史』 中国戲劇出版社
- 図10 『中国面具文化』 上海人民出版社
- 図13 『美術界』 美術界編集部
- 渡辺保 『歌舞伎手帖』 駸々堂出版 一九八二
- 服部幸雄 『歌舞伎のキーワード』 岩波新書八四 一九八九
- 河竹登志夫ほか 『歌舞伎荒事』 毎日新聞社 一九九〇
- 趙曉群・向田和弘 『京劇鑑賞完全マニュアル』 好文出版 一九九八
- 松浦恒雄 「二〇世紀の京劇と梅蘭芳」(『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』 世界思想社 二〇〇三)

○有澤晶子訳『梅蘭芳自伝―舞台生活四十年』（早川書房『悲劇喜劇』一九九七年八月号から一九九八年十月号まで連載）

○梅蘭芳述・土屋育子ほか訳『梅蘭芳「舞台生活四十年」訳注』一一五（『佐賀大学文化教育学部研究論集』一三集一号・一四集二号・一五集一号・同二号・一六集一号 二〇〇八―二〇一一）

## 二 能と元曲

○七里重恵『謡曲と元曲』積文館 一九二六

○王冬蘭『能における中国』東方書店 二〇〇五

○王冬蘭『能』呂后と『前漢書平話』『芸能史研究』一二〇号 一九九三

○金文京「王昭君変文考」『中国文学報』第五〇册 京都大学 一九九五

○金文京『いわゆる一人独唱からみた元雜劇の特色』『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』汲古書院 一九九一

○諷訪春雄『日中比較芸能史』吉川弘文館 一九九四

○赤松紀彦ほか『能楽と崑曲』汲古書院 二〇〇九

## 三 中国の仮面劇——儼戲<sup>なげ</sup>

○田仲一成『中国巫系演劇研究』東京大学東洋文化研究所 一九九三

○廣田律子『鬼の来た道―中国の仮面と祭り』玉川大学出版会 一九九七

○稲畑耕一郎『中国仮面の世界―神と人との交響楽』農文協 二〇〇三

# 高等研選書目録

第 1 巻	美しいダムと水環境づくり	沢 田 敏 男	48 頁	952 円
第 2 巻	進化遺伝学から見た人類の過去と未来	木 村 資 生	48 頁	476 円
第 3 巻	中国とインド — 社会人類学の観点から —	中 根 千 枝	36 頁	476 円
第 4 巻	大人のためのわかる数学 — 数理哲学序説 —	四 方 義 啓	136 頁	762 円
第 5 巻	近未来の法モデル — 近未来から現代を考える —	北 川 善太郎	76 頁	667 円
第 6 巻	無機イオンと生命 — もう一つの生命 —	江 橋 節 郎	52 頁	476 円
第 7 巻	科学と技術の間	西 島 和 彦	49 頁	476 円
第 8 巻	素粒子物理学の 100 年	南 部 陽一郎	50 頁	476 円
第 9 巻	「関西空港」建設の事後評価 — それは世紀の失敗作なのか —	赤 井 浩 一	80 頁	700 円
第 10 巻	地球大気の研究	加 藤 進	82 頁	500 円
第 11 巻	情報社会における著作権とビジネス	北 川 善太郎	156 頁	800 円
第 12 巻	物質(もの)とは何か	井 口 洋 夫	60 頁	500 円
第 13 巻	美しいノイズ — 数学を身近かに —	飛 田 武 幸	61 頁	500 円
第 14 巻	「農」の世界の意味 — 「農」と「生」の相関を中心に —	坂 本 慶 一	131 頁	800 円
第 15 巻	大阪と自然科学	金 森 順次郎	80 頁	700 円
第 16 巻	ゲノムの峠道	松 原 謙 一	122 頁	800 円
第 17 巻	患者や弱者に優しく — 患者中心の医療とインフォームド・コンセントの大切さ —	星 野 一 正	100 頁	800 円
第 18 巻	宇宙の仕組み — 特別なことと普通のこと —	古 在 由 秀	55 頁	800 円
第 19 巻	いのちの歴史を探そう — 君のいのちの不思議 —	岩 槻 邦 男		
	— 君のいのちとタンポポのいのち —	岡 田 益 吉	85 頁	800 円
	— 君たちの体の中にある生き物の歴史 —	政 池 明	145 頁	800 円
第 20 巻	宇宙の謎を素粒子で探る	政 池 明	145 頁	800 円
第 21 巻	岩倉具視 — 『国家』と『家族』 — 米欧巡回中の「メモ帳」とその後の家族の歴史	岩 倉 具 忠	185 頁	1,100 円

※ 第 1 巻から第 21 巻の価格は税抜き表示です。

## 財団法人国際高等研究所と高等研選書

財団法人国際高等研究所は、科学技術の発展に伴う人類社会の諸問題を解決するために、既存の学問領域を超えた多面的な研究活動をおこなっています。その研究を通じて得たさまざまな研究成果情報を集積・加工し、学術出版として情報発信をしています。

高等研選書は、本研究所が主催する講演・シンポジウム・フォーラム等を収録・編集しているもので、高等研創設 15 周年を記念して 1999 年に刊行を始めました。学問に精進された著者自らの語りから、読者の一人ひとりが世代を超えて自然・社会・文化そして人間のありようを考え一助になれば幸いです。

財団法人国際高等研究所所長 尾池和夫

高等研選書 ②

## 能 と 京 劇 ～日中比較演劇論～

ISBN 978-4-906671-70-0

発 行 日	2011 年 10 月 20 日 初版発行
著 者	金 文京
発 行	財団法人国際高等研究所 〒 619-0225 京都府木津川市木津川台 9 丁目 3 番地 Tel. 0774-73-4000 Fax. 0774-73-4005 http://www.iias.or.jp
編集・制作 印刷・製本	実業印刷株式会社

無断で転載・複写する事を禁じます  
©Bunkyo Kin 2011  
Printed in Japan

第22巻	地震を知って震災に備える ～京阪奈地域を中心として～	尾池和夫	108頁	1,000円
第24巻	核なき世界を生きる ～トリウム原子力と国際社会～	亀井敬史	120頁	1,000円
第26巻	生活習慣病の面白健康科学 ～元気に生きるための食事と運動～	森谷敏夫	101頁	1,000円
第27巻	ヒトの心と社会の由来を探る ～霊長類学から見る共感と道徳の進化～	山極壽一	114頁	1,000円

※ 第22巻から第27巻の価格は税込み表示です。

高等研選書 25

# 能 と 京 劇

～日中比較演劇論～

ISBN978-4-906671-70-0  
C0239

価格：1,000 円(税込)



金 文京 (きん・ぶんきょう)

京都大学人文科学研究所教授  
専攻 中国文学

1952 年東京生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。京都大学大学院中国語文学専攻博士課程修了。慶應義塾大学助教授などを経て、現在京都大学人文科学研究所教授。専攻は中国文学。とくに小説と戯曲、および講唱文学をその相互のつながりを社会的背景に即して解明する研究主著に『花関索伝の研究』（共著、汲古書院）『中国小説選』『教養のための中国語』（大修館書店）『三国志演義の世界』

財団法人 国際高等研究所

## 一隈取りと臉譜一

そして京劇など中国の古典劇にも、隈取りに非常によく似た「<sup>リエンブウ</sup>臉譜」が用いられます。「臉」は顔、「譜」はリスト、つまり「顔のリスト」という意味ですが、これは中国の隈取りは日本の歌舞伎よりもずっと多くの色と図柄が用いられ、さまざまな種類があるためです。その種類はまさに千変万化、そのため臉譜芸術と言われるほどです。（本書より抜粋）



本文 10、11 頁より